



折衷の美一金閣

富井 正憲

The beauty of compromise-The golden pavilion

Masanori TOMII

1. はじめに

本稿は日本を代表する建築「金閣」の空間特質について論じると共に、その歴史的、文化的意味が今日われわれが抱えている近代建築運動の純粹主義がもたらした単純性や画一性に対して、何がしかの解答を得ることを目的としている。したがって先にお断りしておかなければならないのは、本稿は歴史の時代考証ではなく、日本伝統建築から発見する建築の設計論、意匠論、造形論であるということである。常々、私は「建築は意味の集積・発散装置」であり、かつ「建築デザインとは知の構築である」と考えている。この視点から日本の伝統建築を見渡したとき、「意味」・「出来事」がぎっしりと詰まった金閣は私にとってまことに格好な研究対象なのである。

2. 金閣と義満

金閣は今日金閣寺あるいは金閣と呼ばれているが、創設時は臨済宗相国寺派に属する鹿苑寺のなかの舍利殿であった。

金閣は京都市の西北隅に位置し、西に衣笠山、背後に左大文字山をひかえた景勝の地に1398年足利3代将軍義満によって建てられた。市の北部に連なるなだらかな山なみは金閣寺周辺一帯を含めて、古くから北山の名で親しまれている。もともと金閣寺の敷地には、西園寺家の氏寺と山荘があった。鎌倉時代(1220年代)に、時の権力者西園寺公経が都の北西の地に「地上の仙境、此岸の浄土」としての西園寺及び北山第を構えたのである。その後、栄枯

盛衰、時代の推移と共に西園寺は荒廃の一途を辿った。

足利将軍義満はこうした西園寺家の荒廃していた敷地を譲り受けると、応永4年(1397年)に山荘北山殿の造営に着手し、庭園、建築ともに可能な限りの粋をつくす。

足利義満は南北朝の合一に成功し、世の太平を回復すると、自身が父の死によってわずか11歳で将軍職を引き継いだと同様に、僅か9歳の子の義持に将軍職を譲り、38歳の若さで出家し、形式上は禅僧となった。当時「花の御所」と呼ばれていた室町弟を出た義満が新しく自分自身の隠居所を造営するために目をつけたのが、都の西北、北山に位置する、当時はすっかり廃墟と化していた西園寺家の敷地であった。隠居所あるいは山荘といっても、金閣で象徴される北山殿はまさに宮殿である。足利幕府絶頂の時代、将軍職を息子に譲ったといっても実権は相変わらず義満が握り、院政の如く自由に采配を振るい、政治の舞台は室町弟からそっくり北山殿に移した。幼い時から優れた禅僧に囲まれ、禅宗と儒教を熱心に学び、また公家からも和学、朝廷儀礼、連歌等の貴族文化を習得した教養人義満は、北山殿に五山の禅僧を集め、池に舟を浮かべ、自ら漢詩を作ってあそび、世阿弥に舞をまわせ、天皇を招いて接待し、極楽浄土の世界を享受した。その一方では政治人として策謀をめぐらし、諸大名を牽制し、自分の息子義嗣を天皇の位につけようと画策した。また元寇以来中絶していた日中貿易を再開し、明との貿易には特別精を出し、莫大な富を蓄積するとともに、中国の書画、骨董の美術品に囲まれ、武家文化の確立に努めた。多大な献納によって、中国皇帝から「日本国王」に任ぜられ、日本人の中でもっとも世界の中心に近づいた男となった。今日われわれはこの義満を中心に北山殿で繰り広げられた豪華洵爛な世界を北山文化と呼ぶ。

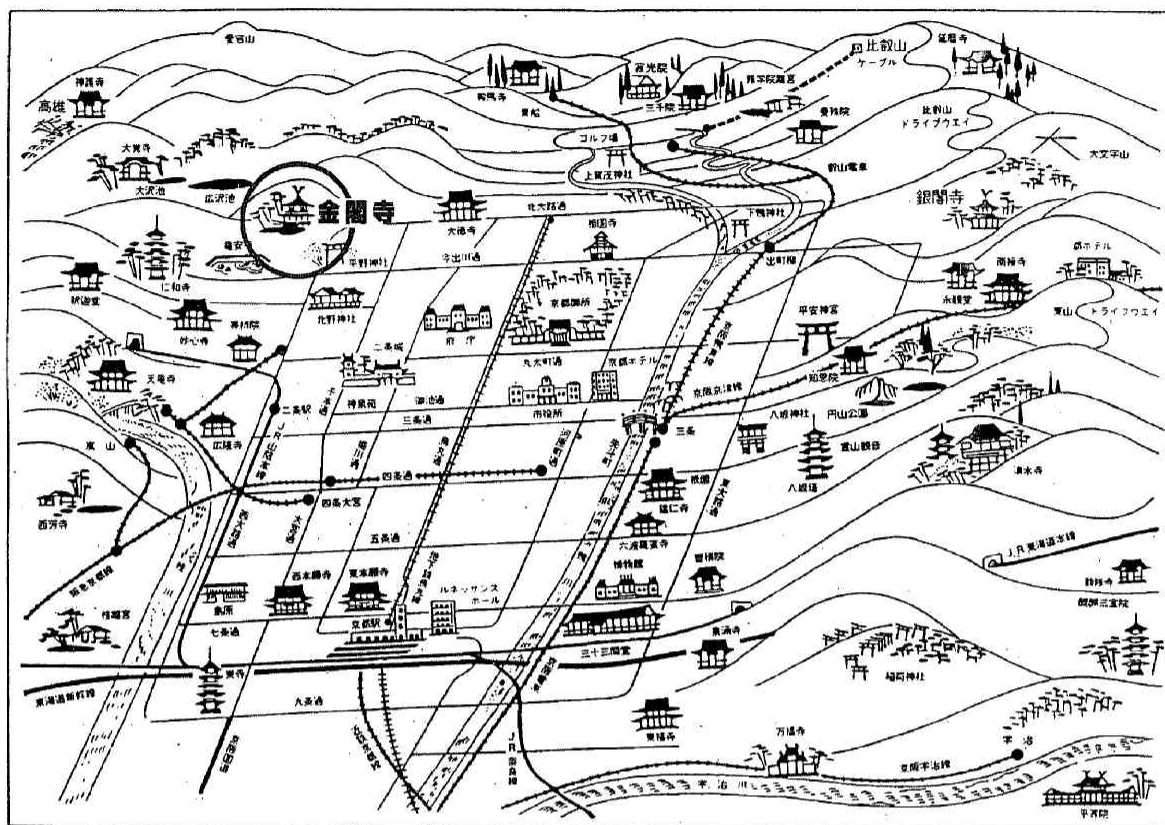


図1 金閣寺位置図

北山殿が完成し、天皇の行幸を仰ぎ、ようやくこれからという時に突然義満は51歳の若さで死ぬ。遺言も残さないその余りにも急な死は、これまでしばしば暗殺説がささやかれる。

彼の死後に北山殿は鹿苑寺と名づけられた。この鹿苑寺の名前は、釈迦が初めて説法したところの地名「鹿野苑」に因んで、金閣の創設者足利義満の法号につけられた鹿苑院殿によっている。

義満がなくなった後の北山殿は宮殿としての機能が消滅し、その主の霊を慰めるための菩提寺へと性格を変え、金閣寺と親しまれながら今日まで続いている。金閣が、義満を祀る本堂としての体裁を整えたのはようやく徳川の時代になってからで、1階の北側を壁にして仏壇をつくる改造が行なわれ、そこに義満像が安置された。

広い庭園は金閣の前にある鏡湖池を中心とし、葦原島(あしわらじま)など大小の島々や、奇岩名石が配され、西の衣笠山を借景とした室町時代の代表的な池泉回遊式庭園である。境内の広さは約132000m²(4万余坪)、鏡湖池の大きさは約6600m²(約2千坪)に及ぶ。庭内にはさらに書院、庭園、方丈庭園、龍門滝、銀河泉、安民沢などがある。

義満生存時は北御所、南御所、護摩堂、天鏡閣など多数の建築物が星のごとくにばらまかれていたが、現在残っている建物は僅かに金閣の他、書院、庫裏、不動堂、鐘楼、

江戸時代の茶室夕佳亭(せっかてい)だけである。

北山殿造営工事のなかで、足利義満が最も趣向を凝らしたのが鏡湖池に面した舍利殿、すなわち現在の金閣である。舍利殿は仏舎利、すなわち釈迦の骨を祀る建物であり、義満はこの建物の様式を構想するにあたって、しばしば参詣していた西方寺を参照したといわれている。建物の高さは約12.5m、木造三層構造である。三階建ての第1層法水院は釣り殿であり、社交の場である。第2層、第3層がそれぞれ仏堂で、第2層の潮音洞には現世を祈る岩屋観音と四天王像、第3層の究竟頂(くつきょうちょう)には遠く彼岸の西方浄土に案内してくれる阿弥陀三尊と二十五菩薩来迎像が安置されていた。因みに究竟頂とは「至上、これが限界」の意味である。その至上の空間の屋根の上には鳳凰が輝く。

現在の仕上げは第1層が素木、第2層、第3層が内外ともに総金箔張り、屋根はさわらの薄い板を何枚も重ねた柿葺きである。1層目は廻縁、広縁と、大きな広間、それに突き出しのあづまやからなる。広間東には階段がつく。床、天井、手すり欄干ともに素木仕上げで、壁は漆喰、建具は蔀戸、寝殿造りの意匠である。2層目は廻縁と広縁の外部と、仏間と会所の二間の内部空間からなる。会所の東側には初層への階段、北側には3層への階段が配置されている。外回りはすべて金箔押し、広縁天井は龍と鳳凰の絵

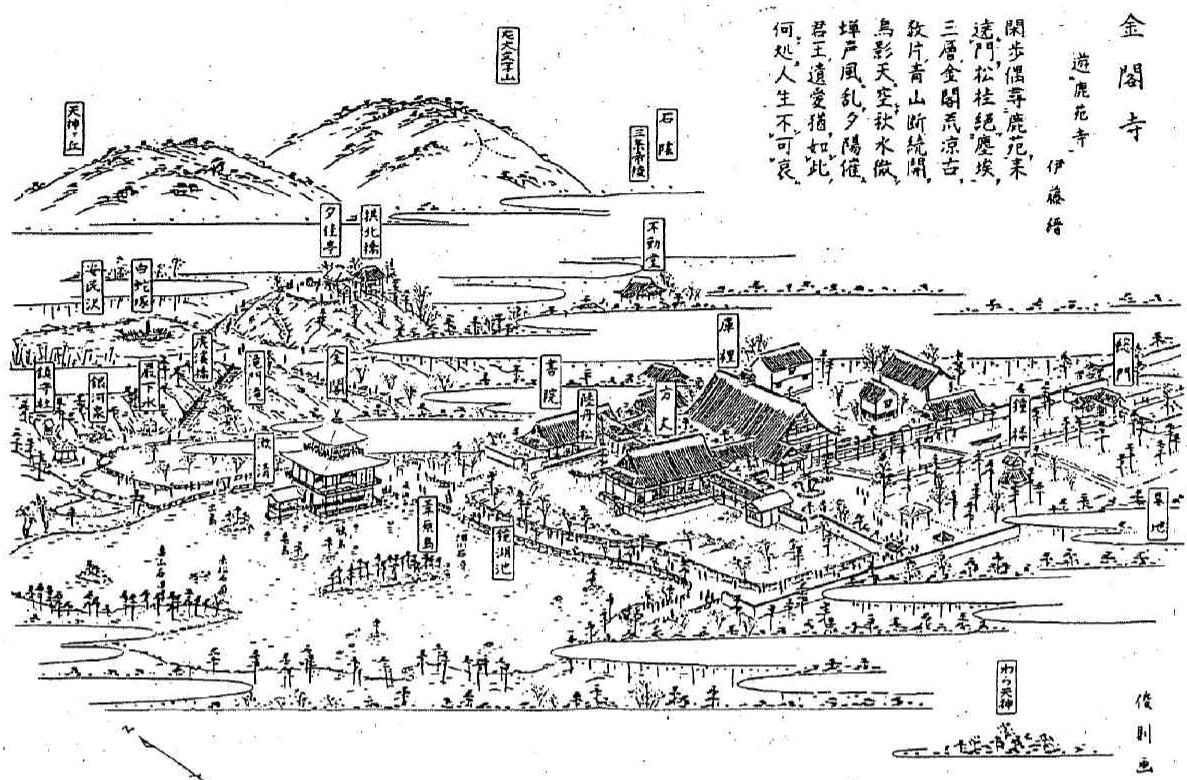


図2 「俊則画」金閣寺鳥瞰図 (パンフレットより)

がある。内部仏間は床が黒漆仕上げ、壁は金箔押し、天井には雲、天女、楽器、花鳥が舞う絵が描かれている。建具は部戸と遣戸がはいる武家造りの意匠である。3層目は廻縁に、三間四方の仏間、そして北廻り縁に階段がある。内外とも床だけが黒漆塗りで、他は全て金箔押しの仕上げである。開口は花頭窓が設けられ、禅宗寺院の唐様意匠である。つまり外から見ると第1層が藤原時代の寝殿造り、第2層が鎌倉時代の武家造り、第3層が中国唐様の禅宗寺院造りで、各層がそれぞれ異なっている。また、創建時には舍利殿の北側に天鏡閣と呼ばれる会所が位置し、この2つの建物の間には拱北廊と呼ばれる橋が架設されていたが、残念ながら今は天鏡閣も橋もない。

今日われわれはこの鹿苑寺金閣(1398年竣工)に、慈照寺銀閣(1489年上棟)と西本願寺飛雲閣(1592年以前建設)を加えて日本の3閣、あるいはすべて京都にあることから洛陽の3閣とも呼ぶ。銀閣は義満の孫、足利8代將軍義政によって建てられた楼閣で、金閣同様に西芳寺舍利殿を模倣しているといわれる。残念ながら銀の仕上げは義政の死によって実現しなかったが、江戸時代から金閣銀閣の名称で親しまれてきている。京都西本願寺にある飛雲閣は池に浮かぶ3層楼閣で、初層が反りのある入母屋、2層が起りのある寄棟、3層が起りの方形で、それぞれ屋根の形が異なる。これは金閣の3層の様式がすべて異なる構成手法と

同じである。池に面した1層にはめずらしい舟入の玄関を持ち、3層には摘星楼とよばれる空中楼閣がのって、京都を俯瞰する。金閣、銀閣、飛雲閣、何れもなんと魅力的なネーミングであり、また軽快で奇抜な意匠に富んだ夢の空間であろうか。金、銀の極楽浄土の輝き、雲の中を漂い星を掴み取る楼、日本の楼閣建築には庭園も含めて、空間的に優れた建築が多い。

昔の中国の山水画をみると、山の奥深くに瓦屋根の矩形をした山荘が良くみうけられる。日本の楼閣の歴史もこうした中国の道教思想から強い影響を受けてきて、中世に入ると日本独特の展開をしていく。それは一方においては「市中の山居」と呼ばれる茶室に代表される侘び寂びの草庵であり、また他方では織田信長の安土城に代表されるような、高い場所から城下を見下ろす威風堂々とした迫力を持つ富と権力の天守閣である。ちょうど金閣、銀閣はその分岐点の建築で、都市の中の草庵でもあり、象徴としての天守閣でもあるのだ。

金閣は創建後2回の大修理を行ないながらも長い年月残ってきたが、戦後の1950年に寺徒弟の放火によって炎上し、一瞬にして消失してしまった。しかしながらその5年後には驚く速さで再建され、不死鳥のごとく蘇ったのである。再建の翌年、三島由紀夫の小説「金閣寺」が発表され、犯人の放火の動機が「金閣の美に対する嫉妬」というデカダン

スな理由が一層金閣人気に拍車をかけた。現在の金閣は再建後の1987年に金箔の大修理と天井画の復元を経た姿である。

この現在の復元された金閣に対し、若くして早世した建築史家宮上茂隆は異議を申し立てた。詳細な検証のもとに創建時と現在の金閣の相違について、次のような重要な指摘を残している。

- ①当初、3階は内外金箔押しであったが、3階床と縁の床、高欄、腰組はすべて黒漆塗りであった。
- ②当初、二階は、高欄を除いて内外ともすべて黒漆塗りだった。現在は三階と同じように、床以外すべて金箔押しになっている。
- ③当初、三階の中心は、一・二階の西側主室の中心と一致していた。二階屋根の東部は入母屋屋根であった。屋根は桧皮葺きであったとみられる。現在の三階中心は、一・二階の全体の中心と一致している。屋根は腰屋根で、柿葺きである。
- ④当初、一階の北面はすべて、南面と同じように蔀戸の開口部であった。現在はすべて土壁になっている。
- ⑤当初、金閣東側には舟入の玄関が付属した。
- ⑥当初、金閣は、北側にあった二階会所「天鏡閣」と、復道(二階廊)拱北廊(きょうほくろう)によってつながれていた。

以上の宮上の研究成果に従い、創建時の金閣の意匠をトレースし直してみると、義満の造った金閣とは現在の2層目武家造り部分が、金箔ではなくて、実は黒漆仕上げでまとめ上げられていたことになる。つまり1層が白、2層が黒、3層が金で、この指摘は金閣の意匠の意味を考える上で非常に重要な指摘である。本稿ではこの宮上が実証した創建時の金閣に従って論考をすすめることとする。

3. 極楽浄土—ユートピアの実現

義満は北山において極楽浄土の理想世界をこの世にいかにも実現しようとしたのであろうか、その具体的な建築手法を金、漆、鏡の3つのキーワードを手がかりに論じてみたい。

北山殿金閣の性格は義満自身の隠居所、親族の住まい、遊苑の席、政治の場といった実生活と、極楽浄土というユートピアをこの世で体験させるという、虚实入り混じった目的を備えていたわけである。

日本における極楽浄土の歴史は、985年(宝和元年)に源信が「往生要集」を著わし、極楽浄土と地獄が死後の世界にあることを唱えたことにはじまる。人々はこぞって極楽浄土を求め、そこに導いてくれる阿弥陀如来への信仰が急速に広まり、阿弥陀如来を本尊とする堂宇が全国的に建てられた。そのなかでも、財力ある権力者は来世への導きを

祈願すると共に、更にはこの世にありながら極楽浄土の幻影に陶酔できる空間を創出しようとしたのである。その代表的な建築が宇治の平等院(1053年)と平泉の金色堂(1124年)であり、そのユートピアの系譜として金閣と銀閣が続く。

もともと金閣が位置する北山周辺一帯の場所は、都の郊外にあたり、古くから墓所、寺院などが多数あって、死者の世界あるいは仏の世界と縁の深い地域であった。その場所に義満は死後の世界をこの世に実現しようとしたのである。そのユートピアの中心となったのが庭では鏡湖池であり、建築では金閣であった。

当時の金閣と義満の様子を窺い知れる貴重な資料が残っている。それは桃山時代にキリスト教宣教師として日本にいたフロイス(1532-1595)が金閣を訪ねた時の文章である。『紫の僧院(大徳寺)から半里、あるいはそれ以上進むと、かつて公方様が静養するために設けた場所がある。そこは非常に古い場所なので、いまなお大いに一見に価する。同所にはとくにつくられた池の真中に、三階建の1種の小さい塔のような建物がある。池付近には小さい島々、各種の形に枝を曲げた多くの松、その他快く、はなはだ美しい樹木がある。人々が語るところによれば、以前には公方様がこの池に彩りを添え美しくするため遠方や異国から集めさせた、多くの、しかもいろいろな異なった種類の水鳥がこの池にいた、とのことである。二階には、幾体かの仏像と、まったく生き写しの公方自身の像が、彼の宗教上の師であった一人の仏僧の像とともに置かれている。廻廊がついた上階はすべて塗金されていた。そこは、かつては公方様の慰安のためだけに用いられ、彼はそこから庭園や池全体をながめ、気が向けば建物の中にいながら池で釣りをしていた。上層にはただ一部屋だけあって、その部屋の床はわずか三枚の板が敷かれており、まったく滑らかで、たった一つの節もない。この建物から少し隔たって、叢林の間から一筋の引水が流れ落ちてくるが、その水は夏でも非常に冷たく、先に述べた池にそそぎこむ。』この文章を読むと、あでやかな北山文化の情景が実によく伝わってくる。さらに具体的には義満が金閣にのぼり、景色を愛で、釣りを楽しんだこと、また彼の死後、2階に義満像と夢窓国師像が安置されていたことなどがよくわかるのである。

創建当初から金色まばゆかった舍利殿が金閣と呼ばれるのはかなり早い時期であり、足利末期からすでに「金泥ヲ以テ悉クダミタレバ京童ドモ是レヲ金閣トゾ申シ奉ル」と京の人々に金閣の名称で親しまれていたが、なぜに義満はこの楼閣を金で仕上げようとしたのであろうか。

古くより、金には聖なるものの意味がある。中国では後漢以来「仏は金人なり」という伝承があり、日本でも奈良の

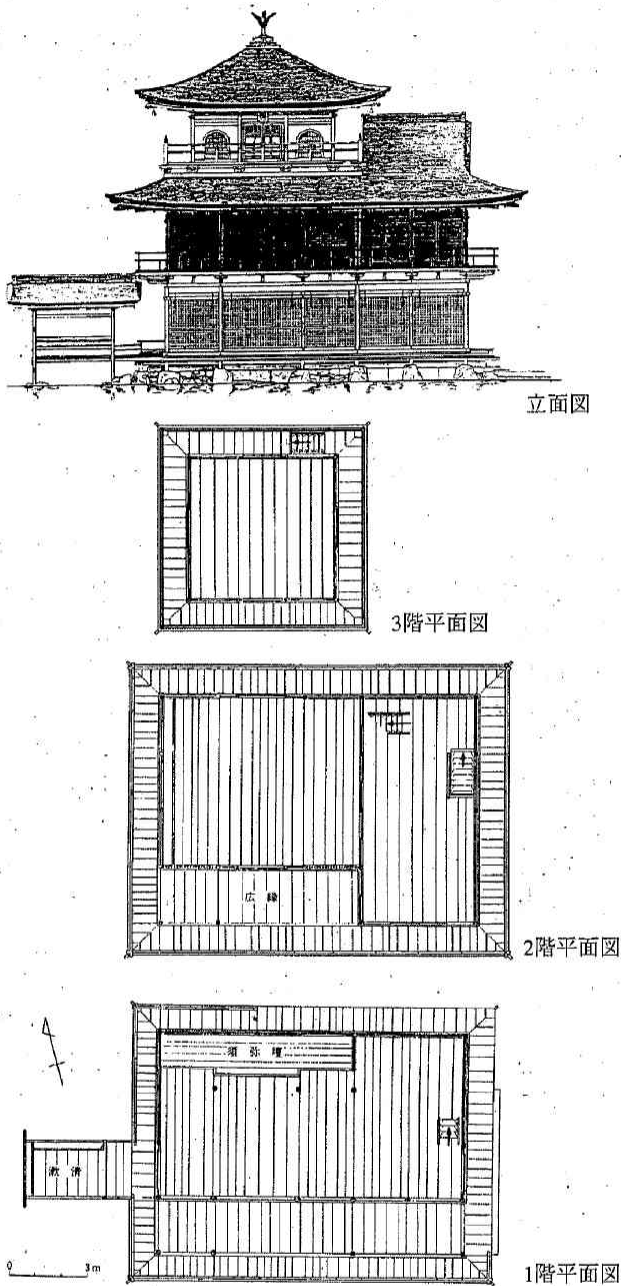


図3 復元金閣南面立面図及び平面図（宮上茂隆作成）

大仏をはじめ、朝日を受けて金色の阿弥陀像が輝く平等院、その名もまさにずばりの中尊寺金色堂があげられ、聖なる世界が金によって演出されてきた。義満の金閣は仏像ばかりでなく、内外を金箔張で仕上げた建物自体が、池に浮かんで、燦然と空中に輝く。その様は仏教の宇宙観を暗喩する。つまり、この世の中は虚空の中に風輪と呼ぶ円盤状のものが、その上に同形の小さな水輪がのり、更にその上に水輪と同形の金輪がのり、この金輪の上にわれわれが生活している山、海、島があり、中央には金・銀・瑠璃・玻璃の四宝からできた最も高い山が位置するという図像であ

る。然り、義満はこの須弥山世界の宇宙像を、湖に浮かぶ金閣にたとえて表現したかったのである。

貴族の時代から武士の時代になるに従い、徐々に金の意味が、聖から、富、権力の象徴へと移行していく。豊臣秀吉がよい例で、組み立て式の黄金の茶室に純金の茶道具を取り揃え、嗜好を凝らした数寄座敷を設えたり、古代ピラミッドのように聚楽第の屋根瓦を全て金葺きにして、人々の目を驚かせたのである。

さて、この燦然と輝く黄金の世界と毅然と対峙するのが2層聴潮閣の黒漆で出来た闇の世界である。漆黒の世界は文字通り、黒い漆を何層にも磨きあげて仕上げる独特の技術である。金閣の昭和の大修理では60回の重ね塗りが施された。素木造の1層から総金箔仕上げの3層への間に、漆黒の潮音閣を中間に挿入した意匠構成は、俗から聖に昇華するための意識の転換を空間的に解決した卓抜な手法である。後の時代になって、この金閣の俗と聖の間に漆黒の空間を挟む巧みな手法を採用したのが、徳川家康の霊を祭った日光東照宮である。東照宮の拝殿と本殿を結ぶさやの間は見事な漆黒仕上げで、この世とあの世の境を闇の空間で区切り、かつ、連結している。北山に帳が下り、総漆黒の2層部分が暗闇に溶け込むとき、究竟頂がぽっかりと宙に浮かぶ。まさに黄金の空中楼閣の出現である。

極楽浄土の世界において、池は鏡である。西洋においても若者が水面に移った自分の顔に見惚れるという神話があるように、金閣の鏡湖池もまさにその名の通り、湖のように大きな水の鏡である。人工的に造られた鏡湖池は北山の山並を借景にし、池の中に様々な石や島を配して、九山八海の宇宙を表現している。金閣正面の中央に浮かぶ島は「葦原島」と呼ばれ、日本列島を意味する。その周囲には蓬莱山を意味する鶴島、亀島が配置され、さらに有力守護大名から寄進された奇岩名石によって神仙諸島や島礁が形づくられる。義満は船に乗り、あるいは金閣にのぼって、この池に浮かぶ世界の縮図を眺め楽しみながら、様々な瞑想に耽ったことであろう。鏡湖池の風に漂う水面は陽光を乱反射させて、それだけでなく眩い金閣寺を一層幻想的にする。加えて、その幻想的な金閣が小波漂う水面に映し出されると、実像と虚像の2つの金閣が、そのまま現世と来世の世界を暗喩する。

この鏡による実と虚の両義的な世界の演出は内部空間にも仕掛けられている。2層の観音洞内部は床と壁が、また3層の究竟閣は床が、それぞれ黒い漆塗りである。漆黒の床仕上げは総鏡張りと同じ効果が生まれる。このために2層には無限の闇の空間が広がり、3層には眩いばかりの黄金の空間が重複し、実像と虚像が転倒し、交差する。平等院にも池が配され、かつ内部の天蓋にも銅鏡がはめこま

れて、灯明の揺れる光が反射して堂内を幻想的にしているが、その効果は金閣に及ばない。水の鏡と漆の鏡。鏡はまさにこの世と、極楽浄土の彼岸の世界を両義的に演出できる魅惑的な装置である。そして鏡の魅力は時代が移り、素材がガラスになっても変わることなく現代まで続いている。

義満は周到に死者の世界に縁の深い場所を選択しながら、金箔、黒漆、水鏡、鏡板を用いて極楽浄土の理想世界を建築化し、後世日本を代表する名建築に仕立ててみせたのである。

4. 折衷の美—金閣

金閣は3つの様式を見事に調和させた室町時代の代表的な建物と度々紹介されているが、その折衷の意味はつまびらかにされていない。なぜに1つ屋根の下にそれぞれ白・黒・金の色彩をもち、寝殿造り・武家造り・禅宗様の3つの異なる様式から構成された建築が生まれたのであろうか。その疑問に対しては先の宮上の研究成果から事実内容を確認できるので、そのトレースからはじめてみたい。

義満以前の持ち主である西園寺家の時代には、現在の金閣の位置にはもともと釣り殿が建っていた。釣り殿とは、平安以降の貴族の住居形式である寝殿造りの1つの建物である。母屋である寝殿から池に向かって廊下が伸び、その先端に浮かぶ納涼、遊興のための吹きさらし空間である。義満はこの釣り殿の上に、かれの敬愛していた夢窓国師が作庭建築した西方寺の舍利殿をのせることを思いついたのである。建物が現存しないが、記録によると西方寺の舍利殿は2層造りで、一階は座禅の床となる住宅建築、二階は舍利を安置した禅宗様仏堂から構成されていたといわれている。また、金閣同様、8代將軍義政も銀閣をつくるにあたってこの西方寺の舍利殿を模倣したといわれている。確かに2層の銀閣寺は1層目が武家造り、2層目が禅宗様である。釣り殿の上に2層造りの銀閣がのったと考えれば、金閣の異なる様式の出来方は納得できる。

そこで重要になってくるのは、こうした折衷様式を指示した義満の心の内である。義満の意図を知るために、それぞれの様式の意味内容から考えてみよう。1層はこれまでの平安貴族の王朝文化、2層目は始まったばかりの新興武家勢力の文化、3層目は中国禅宗の世界、つまり1層、2層は和様、3層目は唐様、各層の異なるスタイルは、時代と文化を表現している。更に建物の目的からいえば、1層は日常の世界、2層目は東側の文芸寄り合いの場所と西側の仏の世界、3層は仏の世界、しかも2層に安置された観音像は現世の安寧、3層の阿弥陀仏は来世の祈願である。俗と聖、現世と来世、日本と中国、貴族と武士、なんという両義的、多義的な意味の重層であろうか。この両義性は金閣という

1つの建物だけでは終わらない。金閣とそれを包み込む環境のあいだの人工美と自然美の対比、池に浮かぶ実像の金閣と水に映し込まれた転倒の虚像、都の喧騒と北山の静粛へと対象は拡大する。更に見逃してならないのは金閣の屋根の上に燦然と輝く鳳凰の形象である。鳳凰とは古くから中国の伝説で、この世に聖天子がでるとあらわれると語り継がれてきた想像上の珍鳥で、体の前半身が鱗、後半身が鹿、背は亀、首は蛇、尾は魚の混成の鳥である。このハイブリットの珍鳥は各層それぞれの意匠が異なる折衷様式の金閣にとって、なんとふさわしい棟飾りではなからうか。まさに金閣は多種多様な矛盾と対立に満ちた暗喩が、準備周到に集められた意味の集積・発生装置であり、その空間表現は折衷の美そのものである。

5. むすび

今日、われわれは金閣を表現している意味の断片の集積による折衷手法を、コラージュ、あるいはアッサンブラージュと呼んでいる。この折衷の手法によって出来上がった義満の金閣は、近代以後の建築を模索してきた2人の代表的な建築家、磯崎新の「建築とは構築する知の暗喩である」と、M.グレイブスの「建築とは基本的に数々のメタフォアの空間的集合体である」のマニフェストをまさに象徴する建築といえよう。今日われわれが西洋建築史でみることできるように、ルネッサンスにおける規則性、明瞭性、中心性、自立性、基本幾何学の調和と秩序と美に満ちた理想主義的な完全形態が、その後のマニエリズムの時代に不規則、不明瞭、変形、不確定、楕円の力動的な崩しの形態を獲得したように、あるいはまた、かのアルチンボルド(1527—1593)が四季の果実と花を寄せ集め合成して、皇帝ルドルフ二世をウェルトゥムヌスという多様性の神に見立てた肖像画と同じように、金閣はまさに日本のマニエリズムの代表建築なのである。それも西洋でマニエリズム建築が登場するより、はるか以前に、遠く離れた東洋ですでに同じような建築的表現が試みられていたのである。平安の貴族の秩序ある世界が崩壊し、武士の時代に突入し、南北朝に世界が割れ、地方豪族が群雄割拠する激動の鎌倉時代を経て、足利3代目將軍義満の時代に收拾のめどが立ち、ようやく新しく武士の時代が開花しようかという大きな時代の転換の、中世の戦国の激動の時期の入り口に似つかわしい不確定で、不定立な、不調和な、非対称で、それだけに幻想的で、不透明で、力動的な魅力に満ち満ちた空間的豊穡さを獲得した金閣。義満が構想した金閣は、1層から3層まで中心が1本にのび、その頂に鳳凰が輝く現在の復元された静的な金閣ではなく、宮上が実証したように3層部分が1層、2層の中心から西にはずれ、かつ二階の屋根の形も東が入母屋になる、それはまるで飛雲閣3階の摘星閣

が中心からズレ、方形、入母屋、寄せ棟の3層の異なる屋根が複雑に重なる様と同じである。安定した絶対的な静止ではなく、対立と矛盾の不安定な中に、躍動を表現した世界だったに違いない。まるで義満はようやく世の中を平定はしたが、その後に来る天下騒乱、安土・桃山の戦国の激動を既にこのとき予見していたかのような金閣の意匠である。

金閣にみられたコラージュ、アッサンブラージュの折衷手法。この両義的かつ多義的表現手法が、これまでの単純で退屈なモダニズムの箱の呪縛を解き放ち、出来事や意味のぎっしり詰まったこれからの建築を切り開いてくれると確信する。

参考文献

- 1) 「金閣寺」監修・発行 鹿苑寺 (1987)
- 2) 井沢元彦「天皇になろうとした將軍」小学館文庫 (1998)
- 3) フロイス著 松田毅一、川崎桃太訳「日本史」
- 4) 三島由紀夫「金閣寺」
- 5) 宮上茂隆、日本名建築写真選集第11巻 「金閣寺・銀閣寺」新潮社 (1992)
- 6) 西ヶ谷恭弘著 伊藤ていじ監修「日本の名庭一心とかたち」制作NHKサービスセンター (2000)
- 7) 村田次郎「再建金閣」(1956)
- 8) 「不死鳥金閣寺」芸術新潮 (1998. 1)
- 9) 宮上茂隆「金閣天と地」ミサワ出版pp249.
- 10) 磯崎新「イメージ・ゲーム」鹿島出版 (pp47)
- 12) [History of Modern Art] BSS出版
- 13) 水上勉「金閣炎上」新潮社 (1979)